

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- 今年度も持続可能で「豊かな」暮らしを追求していきます ……1
- 心を揺さぶられたネパールスタディツアー ……2～3
- ラオスの村で今… ……4～5
- カンボジア・タケオ州の訓練センターへの支援は終了しました ……6
- 始めます！折れない心で立ち直る女性たちの支援 ……6
- 考えよう「共に生きる」ということ ……7
- 活動日誌 ……7
- 気仙沼だより その7 ……8
- INFORMATION ……8

4月から消費税が5%から8%に上がりました。1,000円で30円のアップ。知らないうちに出費が増えています。これに対し、消費者はどのように行動するのでしょうか。増税された分が福祉、医療、教育など、国民の暮らしをよりよくするために使われるなら多少の我慢は必要でしょう。税金の使い途をしっかりと見ていくことが重要です。しかし、生活が困難な人たちにとっては、なおさら苦しい経済状況になることは必至です。より安い物を求めて買い物をする人も多くなるでしょう。この「より安い」という文句が世界中で厳しい労働や貧しい暮らしを作り出していることも心に留めておきたいと思います。シンプルで「豊かな」暮らしを創造していきたいと思ひます。

地球の木は「分かち合う暮らし」をテーマにしてきました。日本の、物の豊富な生活のために他の国々の人々が苦しい思いをしないように、資源を根こそぎ取らないように、緑豊かで平和な未来をも次の世代と分かち合いたいという願いを込めています。

今年度も持続可能で「豊かな」暮らしを追求していきます

2013年度、地球の木は新しいメンバーを含めた理事会でスタートしました。国際協力プログラム、地球の木講座などの国内活動、広報活動、活動資金の確保などに新しい視点を取り入れることができました。


2014年度は、カンボジア、ラオス、ネパールの海外プログラムを継続するとともに、カンボジアで新しいプログラムを開始します。急速な発展のなかで、女性たちが暴力という被害に遭っています。このような女性たちが法的、精神的なサポートを得て自立するための支援です。女性会員の多い地球の木ならではのプログラムを応援してください。

経済至上主義でなく、持続可能で「豊かな」暮らしのあり方を考えるための学習会、地球の木講座、国内スタディツアーを今年もおこないます。地域でできる講座やアピールも、たうんチームのみなさんとおこなっていきます。ネットワークを広げ、多文化共生を育てるための活動も続けていきます。


今年もみなさまのご協力、ご参加をよろしくお願いいたします。
(理事長 丸谷 士都子)

地球の木の海外支援プログラムから




 **カンボジア**
タケオ州アン村で自然染め、手織りをしているヌーンさん



 **ラオス**
村びとに森林資源管理について説明をしているJVC現地スタッフ



 **ネパール**
収入創出プログラムに参加している女性達と交流したスタディツアーメンバー

心を揺さぶられた ネパールスタディツアー

ナガルコットからのご来光

マンガルタール村周辺で実施している「幸せ分かち合いムーブメント」が始まって7年目になりました。そもそも「幸せを分かち合う」ということは、村のみなさんとの交流を経て学び合うというプロセスがあってはじめて、本当の意味での「分かち合い」になるのだと思います。

今年集まったメンバーは年齢も5歳から70代と幅が広く、家族のような雰囲気でした。さらにこの旅を興味深いものにしたのは、現地からのふたりのネパール人の参加でした。参加者のお義母さんラマデビさんと、通訳の stjuta さんの同行です。

訪問地はマンガルタール村の高校と、新しく一部の活動が始まったカルパチョーク村。ここは過疎化が始まっており、様々な課題が見える村です。そんな厳しい状況の中、小中学校、高齢者、ユースグループ、母親グループとの交流を現地では準備してくれました。カトマンズの世界遺産を巡った後、近郊の村では、前のプログラムのパートナー、ニルマラさんが協同組合訪問のプログラムを組み立ててくれました。参加者の声をご紹介します。

(ネパールチーム 丸谷 士都子)

ツアー日程



2/11	夜 カトマンズ到着
2/12	カブレ郡の郡都ドリケルでオリエンテーション 市内散策 ヒマラヤ山脈を展望
2/13	マンガルタール村で高校訪問・農民と交流、 カルパチョーク村で散策、ホームステイ
2/14	小中学校訪問、村の長老たち・ユースグループ・母親グループと交流、 ホームステイ
2/15	ナガルコットの丘 散策
2/16	ご来光を拝む カトマンズ ボウダナート寺院、王宮広場観光
2/17	ニルマラさんが代表を務めるNGO訪問 バタン王宮広場観光・買い物 イマドル村泊
2/18	SOARSメンバーと、ルブ村の2つの協同組合訪問 夜 羽田に向けて出発
2/19	昼 羽田到着

たくさんの発見



歓迎のカダ(スカーフ)を受け取る筆者

「百聞は一見にしかず」のとおりで発見がたくさんありました。「ナマステ」もその一つ。両手を胸の前に合わせてかわす挨拶は、いつでも、どこでも、だれにでも使えて、笑顔でナマステと返してくれるとっても便利な言葉だと発見しました。

ミーティングに最後までつきあってくれたホストのランジット

さんが翌日結婚式を控えていると聞いても、半信半疑でしたのですが、翌朝背広に着替えて家の前で家族と記念撮影にポーズをとっているのを見てやっと本当なのだと納得しました。家族も親戚も式を控えて忙しい中、ホームステイを受け入れて下さったことありがとうございました。乾季は水不足になり、お米もよそから買っているのを知

あとから聞いてますます感謝の気持ちが大きくなりました。人の優しさも発見の一つです。村は表向きとても穏やかで、自給自足の伝統を守った生活ができているように思いましたが、若い人は仕事を求めて都会や海外に出ていき、より良い教育を求めて家族で村を出ていく人もふえているなど悩みがあることを知りました。

(森谷 八重子)



お嫁さんを迎えに行くランジットさんと家族

理想と現実の狭間で

私は「幸せ分かち合いムーブメント」が始まったばかりのカルパチヨーク村を訪問して、あらためてこの運動の難しさを実感させられた。この村では水不足の問題が深刻であり、村人たちは水問題が解決しないことには何もできない、と思っている。そのような場で「真の開発とは幸せになること、それを分かち合うことだ」という言葉は説得力を持たないように感じた。

地球の木は教育分野への支援を中心にするという方向性は既に出されていたため、教育の課題を学校で聞いてみると、教員たちからは英語教育が必要だという意見ばかり出てきた。確かに英語教育は私立校との決定的な違いであり、多くの生徒が私立校で学ぶために村を離れている。しかし、SAGUNや地球の木が目指している教育とは、自分たちの村を自分たちでよくしていく力を育てることであり、英語を学んで海外に行き自分の家族だけが豊かに暮らせることを望む教育ではない。しかし、そんな言葉も現実の前では

「見て、聞いて、そして知って考えた」

カルパチヨーク村での農村体験は70代の私にとって、初めてであり、滞在中に「見て、聞いて、そして知って考えた」ことは数多くあった。

まず、山岳地帯に棲むタマン族がカマドで火を起し、原始宗教のシャーマンと共生する姿を目の当たりにして、「人間ってどんな環境でも生き耐えられる」ことは刺激的であった。これとともに、水が「命の水」と実体験した。村民はいまだに雨水を生活用水とし、毎日、女性が3時間かけて「水汲み」していることに、「思いついた安易な対応策」は口にできなかった。

もう一つは教育環境。「教育は国家百年の計」と言われ、第三世界にあるとされるネパールにもこの格言が当てはまるのではないかと考えた。というのも、教育設備の貧弱さ、公私立校の格差、教員の質などに唖然とした。が、救いは子どもたちの純粋さと関係者の情熱。これがある限り、未来はある。「幸せ分かち合いムーブメント」の意義を改めて思う日々である。(野崎 俊一)



カトマンズ市内にて

薄っぺらい感じがした。

同時に、そんな現実と向き合いながら活動するSAGUNのワーカーたちの真剣さや難しさを知ることができた。サルバジットさんが、タマン語も交えながら村人たちと生き生きと話す姿に心が打たれた。私も、あらためてこの難しい挑戦にSAGUNの人たちと一緒に取り組んでいきたいと思った。

もう一つ、今回のツアーで驚いたことは、カトマンズ近郊のルブ村で訪問した協同組合の活発さである。500人以上のメンバーを抱え、傘下には乳製品やキノコなど業種別の協同組合が活動している。年間予算は3,500万ルピー、ローンの提供の他、医療手当、出産祝い金、弔慰金、高齢者や成績優秀者への表彰などが行われている。情報交換が効果的に行われ、福利厚生機能まで兼ね備え、かつ互いに地域で顔が見える関係を保ちながら活発に活動している。日本では、協同組合が大きくなり組織化されるほど、地域活動の基盤が薄れがちだが、ルブ村の協同組合はネパールの他地域にとっても、日本の私たちにとってもよいモデルとなるだろう。(ネパールチーム 磯野 昌子)



5歳の息子とネパールのお義母さんと参加



通訳の stjta さん

ネパール人が知らなかったネパール

今回地球の木とSAGUNの活動に参加できてすごく嬉しくなりました。ネパール人だけど私はネパールのことぜんぜん知らないと感じました。

ネパールとはカトマンズだけじゃなかったですね。昔はあったけど今はネパールにないよといったことが、カルパチヨークの村に今も存在していました。マンガルタールの学校に女の子がたくさんいました。奨学生も女の子が多かったです。男達はよい教育を受けるためにカトマンズに移るわけを聞いたら、やっぱり男と女の差がまだあるねと感じました。ちょっと悲しかったです。

カルパチヨークにホームステイできたことはよい経験になりました。村での生活はたいへん厳しいことが多くあるが、村の人々は都市の人々に比べ、幸せに見えます。客人を敬い、隣人同士仲良く暮らしています。いつも笑顔で楽しそうにしています。地球の木のメンバーは村人たちが一生懸命にもてなしてくれたことをたいそう嬉しそうにしていました。大事なものは心の中の幸せだと感じました。

(stjta・タマン)



ラオスの村で今...

ラオス現地訪問 (2/20~23)

ジグソーパズルを埋めるように

JVCを通してラオスの「村人の森を守る権利と生活改善の応援」をし、自分たちの暮らしとの関わりを考えてきた地球の木。私は、そんなラオスプログラムに関わって、かれこれ10年になる。それまでラオスには全く関心もなく、インドシナ半島のどこかの国程度にしか知らなかった。

数えてみると今回が7度目の訪問となった。訪れるたびに、まったく何もなかったラオスのイメージが、ジグソーパズルのピースを埋めるように、私なりに少しずつできあがりつつある。

今回は主に牛銀行とゴムのプランテーションについて報告したいと思う。 (ラオスチーム 中野 真理子)

パルー村で牛銀行が始まる

ラオスの村では元々牛や水牛など大型家畜は、災害や病気、教育など不意の出費に備える貯金のような役割を果たしてきた。JVCの牛銀行は、牛を持たない人に貸し出して生活改善に役立ててもらおう支援である。

今回パルー村で2013年度から始まった牛銀行を見学し、実践者との打ち合わせに同席した。

パルー村では牛を持たない貧困層の希望者から4家族を選び、メス牛を2頭ずつ3年間貸し出す。その間に生まれた子牛を母牛の元で2歳になるまで育てて牛銀行に返却してもらい、次の希望家族に貸し出していくというシステムである。家族には母牛が残るので、その後生まれた牛はすべてその家族の所有となる。なお返却された子牛がオスの場合は、売ってその代金でメス牛を買って次の家族に貸し出す。またメス牛だけでどうやって増えるのかといえば、ラオスの村では牛は放牧されているので、借りたメス牛は自然にほぼ100%妊娠するという。

牛1頭は\$300から\$400と高価であるので、健康に育てて、このシステムが継続的にうまく運営できるようにJVCと村の牛銀行委員会、実践家族との間で細かなルール作りが進められている。又ワクチン接種など牛の健康管理のための研修なども行われる。



牛は朝放牧され、夜はこの村の共同の柵の中にもどる

実践者の声

牛を飼って将来どのようにしたいですか？

ユーイさん夫妻 (夫60歳・妻50歳)



私の家は6人子どもがいます。妻は12人生んだのですが、元気で暮らしているのは、その半分です。牛が可能な限り沢山の子牛を産んでくれることを期待しています。牛の数が増えたら、そのうちの何頭かを売って、丈夫で大きな家を建てたいです。18歳の息子が牛の世話をします。

デュアンチャイ夫妻 (夫30歳・妻28歳)



私は土地が欲しいです。私の田んぼは小さく、家族が年間を通じて食べられるだけのお米を作れません。子どもがたくさんいるので、多くのお米が必要です。将来的には、牛を売って土地だけではなく、農機具も欲しいですね。



ゴムのプランテーション

今回の訪問で一番ショックだったのは、今までにも会報で何度も触れてきたゴムのプランテーション(農園)を実際に目にしたことであった。

2010年、12年と訪問の度に、森が焼かれ、ゴムの苗木が植林されたのを見てきたのだったが、今回またファイサイ村近辺を訪れると、車で何十分行ってもひたすら続く一本道の両側に、4~5mに成長して鮮やかな緑色の葉をつけたパラゴムのプランテーションが出現していた。これが何度も聞いていたベトナム企業によるゴム農園のための土地収用問題の実態だったのだ。

ベトナムは元々ゴムの生産国だったが、近年自国内ではもうゴム農園にする土地がなくなり、ベトナムの大企業がカンボジアやラオスに進出してきている。郡の行政官からは、政府が許可して

いるのだからと言われ、ラオスの村の人たちは抗うこともできないまま、また病院や学校をつくるという甘言にだまされて十分な補償もなしに、いつのまにか豊富な食糧庫である村の森を失ってしまった。

さらに今回村人から聞いたのは、ゴム農園での草取りや肥料やりの仕事はたまにあるが、仕事はきつく賃金は安いことや、野生の象が住処を追われて畑を荒らすようになったこと、水への農薬の影響が心配されること、などだった。

国の経済発展は確かに必要なことではあるが、NGOの立場から現状をみると、一番の問題は、当事者である村人の同意や権利が殆ど無視されていることだと思う。なぜこのような理不尽なことに対して彼らが声をあげないのか。社会主義という国の体制もあるだろうが、ひとつには幸せなことに彼らは森と共存することで、今まで飢えもなく村の中で大きな争いもなく暮らしてこられたことにもあるのだろう。現地の少数民族ブルーの言葉には、そもそも「政府」「法律」「権利」「銀行」などの語彙がなく、その必要もなかったのである。しかしこういう時代になって不当なやり方に自分たちで立ち向かわなければならなくなった。JVCの法律研修などの成果もあって、自分たちの権利の主張ができるようになったと気づき始め、企業からの再度の接触を断った村も出てきているという。

ラオス人スタッフの頼もしい成長

今回の訪問でもうひとつ印象的だったのは、行く先々の村で見かけた、*フンパンさんを中心とするJVCのラオス人スタッフの頼もしい成長ぶりである。また8人中4人のスタッフが対象村に多いブルー族出身で、ブルーの文化や慣習をよく知る彼らがパイプ役となっていることも心強い。

弁護士資格を取って土地問題に役立てようとするレノル君や、村の身近な問題を題材に劇の台本を書いて村で上演しているホンクおさんなど、こういったラオス人スタッフの同胞への真摯な働きかけこそが、村人に少しずつ意識の変化をもたらしているのではないかと思った。

地球の木の長年にわたるラオス支援も、ローカルスタッフの人材育成を通してラオスの村の役に立っていると確信した訪問であった。

編集註：フンパンさんは2009年、日本(栃木)のアジア学院で9ヵ月間の農業研修をしました。地球の木はその費用の一部を支援しました。ブルー族:サワナケート県に住む少数民族



村人の中に入って人々の意見を聞き出すフンパンさん

カンマイ村で見つけたこんな光景



「アタシもいっしょに…」 「キミのおっぱいじゃないんだけど…」 おおらかな子育てです。



村の真ん中に建築中のこの小屋は、なんとお産小屋とのこと。もうすぐ奥さんが出産予定というダンナさんが作業していた。

カンボジア・タケオ州の訓練 センターへの支援は終了しました。

初めは、まったく売れるようなものは作れなかったセンターですが、この8年間でとても素敵なスカーフを作るようになりました。アドバイスといっても、地球の木が彼女たちに何を教えたか？というと、まず「織る前には手をきれいに洗う」とか「織っている途中で汚さない」「丁寧に織る」など指導以前の話から。首都プノンペンへ行ったこともない農村の生徒たちにどうやってセンスを学んでもらうか？と考え、プノンペンで人気のショップで流行のスカーフを何枚も買って、それを見せたりもしました。先生や生徒たちと仲良くなってくると、少し大げさに褒め、そして厳しく検品することにしました。生徒たちの技術はどんどん上達し、2010年頃からは、できあがりを見るのが楽しみなほどになりました。



「私の織るスカーフを楽しみに待っていてくれる人がいる」そのことが彼女たちの「やる気」につながり、「自信」となりました。地球の木側でも、たくさんの人たちがセンターの少女たちが織るスカーフを楽しみに待つようになり、カンボジアの少女たちと日本にいる人たちとの心をつなぐ支援ができました。

最近では、プノンペンの地価高騰で、工場が農村部にまで進出してきました。工場へ働きに出る少女たちが多くなり、センターに来る生徒たちも少なくなっています。センターでは、できあがったものを自分たちでイベントへ売りに行ったり、カフェの開店を計画したりと、自立に向けて歩んでいることも確認できました。これからもセンターとは「フェアトレードのパートナー」として交流していきます。

タケオのアン村でのプログラムは継続し、環境にやさしい自然染色を使った伝統的な織物作りを支援しながら、農村の課題を考えていきます。

8年間のご支援、ご協力ありがとうございました。

(クメールシルクチーム 筒井 由紀子)



自分が織ったスカーフを持って

始めます！

“折れない心で立ち直る女性たち”の支援

今年度よりカンボジア支援の担当になりました。私は、2004年よりカンボジアで2年間過ごし、地雷の被害者たちの支援を行った経験があります。近年急速に発展するカンボジアを見て、昔の姿を懐かしく思いつつも嬉しく、村々に建てられた学校や病院を見ていると、もはやカンボジアに支援など必要ないのかとも思います。そんな中、去年の国連のレポートに驚かされました。「カンボジアの18才から23才までの72%の男性がレイプの経験者」という衝撃的なリサーチ報告でした。なぜ？ どうして？ 原因となる歴史、文化背景。そして被害者たちの深刻な状況を知りました。警察と法律がしっかりと機能していないカンボジアでは、被害者が被害を届けることもできず、トラウマを抱えて生きていかねばなりません。そしてさらに悪化する状況は想像以上のものでした。

今回サポートする団体「CWCC(Cambodian Women's Crisis Center)」はレイプやDVなどで被害を受

けた女性の支援を1997年より行っています。国内に3つのシェルターを運営し、保護された女性の法律相談、カウンセリング、自立への技術支援などを行っています。被害者のプライバシーや状況の深刻さから、とてもデリケートな支援のため、活動が知られていません。

女性が社会的に安心して生活できる環境、日本にいると当たり前のようなようですが、それがまだないカンボジアで更に増え続ける被害者がいます。地球の木はこの団体と一緒に、彼女たちにもう一度立ち上がるチャンスを与える支援を始めます。皆さんと一緒に、彼女たちがまた立ち上がる姿を見届けられたらと思います

(理事 古田 麻利子)



CWCCのキッズルーム入口

知えよう！ 「共に生きる」ということ

地球の木は、国際理解や多文化共生の意義を市民の間に深めるために「南北 코리아 と日本のともだち展」や「あーすフェスタかながわ」、また今年から始まった「外国人学校の子どもたちの絵画展」などに関わりながら、東アジアの平和や「多文化共生」の問題に取り組んでいる。昨今、朝鮮学校への補助金カットやヘイトスピーチなど、排外的な動きが顕著になっている状況の中で、在日外国人の問題に取り組んでいる県内の市民団体の人たちと一緒に、神奈川における「多文化共生」をもう一度皆で考える機会を持とうと、三回にわたって連続学習会「かながわ『共に生きる』学習会」を企画した。

第一回「多文化共生社会と私たち」(11/17)

第二回「かながわ多文化共生のあゆみとこれから」(12/6)

第三回「近現代史から学ぶ～在日はじめて物語」(3/15)

その中から、朝鮮大学准教授の李 柄輝(リ ヒョンヒ)さんを講師に迎えて行われた三回目の学習会の報告をします。李さんは、1910年の韓国併合から終戦までの植民地時代の朝鮮半島の状況、朝鮮人が日本に渡来せざるを得なかった経緯などについて話した。小さい頃の記憶で、祖父母が朝鮮語で語りかけそれに父が日本語で応える。そのやりとりが不思議でたまらなかったという李さん(彼は1972年生まれの在日三世)。それは1910年に始まった日本の植民地支配に由来する。35年間にわたり朝鮮語教育が全廃され、日本語を強要され、母語を失い、創氏改名を余儀なくされた。植民地支配下で厳しくなった状況の中、職を求めて日本に渡ったり、「強制連行」で連れてこられたりした人たちで、1945年終戦時には220万人を超える朝鮮人(当時は皇国臣民=つまり日本人として)が日本にいた。終戦と同時に、多くは朝鮮半島に戻ったが、手段がなかったり、祖国の「動乱」で帰るに帰れなかったりした64万人余が日本に残った。これが在日コリアン「一世」である。

異国にいながらも朝鮮人としての民族の誇りを失わず、奪われた言葉、文化を取り戻すための民族教育が始まったのは1946年。朝鮮学校の始まりである。

李さんが「同胞」という言葉を何度も口にした。祖国に対して強い思いを持ちながら異国で暮らし、その祖国が二つに分断され、今住んでいる国で様々な試練を受けている。しかし世代交代が進み、在日一世の数が少なくなり、四世も生まれている現在、彼らの意識も多様化していることに、李さんは複雑な思いを抱いているようだった。

そんな在日コリアンの人たちが日々どのような気持ちで暮らしているのか、ほんのわずかではあるが理解できた気がする。日本と韓国・朝鮮の歴史認識の違いは容易に埋まらないと言われているが、その歴史をきちんと知ろうとすることはとても大切だと思った。

(会報作成チーム 浜辺 美英子)



暑かったあ！「あーすフェスタかながわ2014」地球の木のブースに来た「かにゃお」。
神奈川県NPO協働推進課のホームページ「かにゃさんぽ」に地球の木へのインタビューが出ています。

活動日誌(3月～5月抜粋)

3月	9・10日	デポー展示会(登戸)
1日	13日	「山手アートプラットホーム」オープニングイベント参加(中区大和町商店街)
8日	18・19日	デポー展示会(鎌倉)
	21日	第8回理事会
9～30日	24日	監査
外国人学校の子どもたちの絵画展(横浜中央図書館)	5月	
15日	9～11日	かまくら市民活動の日フェスティバル展示参加(鎌倉生涯学習センター)
出前講座「タルー族の家族ゲーム」(大和市桜丘学習センター)	10日	デポー展示会(日限山)
カンボジアの話(WEショップ鶴見)	17・18日	あーすフェスタかながわ2014出店(あーすプラザ)
第3回かながわ共に生きる学習会(横浜中央YMCA)	19日	第9回理事会
18日	23日	地球の木カフェ@湘南台(湘南台文化センター)
国内事業ミーティング	25日	かながわ湊フェスタ出店(沢渡中央公園)
24日	26・27日	デポー展示会(緑園)
第7回理事会	31日	第15回地球の木総会
26日		
地球の木カフェ期末セール		
29日		
ラオス報告会(平沼記念会館)		
29・30日		
教材体験フェスタ参加(JICA横浜)		
4月		
3・4日		
デポー展示会(緑園)		
5日		
ネパールスタディツアー報告会(ネパールレストラン)		

気仙沼支援報告

気仙沼だより その7

3月末震災から3年が経過した気仙沼を訪ねました。

東北自動車道の一ノ関から気仙沼へ向かう道路は、新しく道幅も広くなり走りやすくなっています。どうも以前から道路計画はあったようですが、実現されてこなかったものが、復興道路と称し、あちこちで工事がスタートしているようです。

まちでかさ上げされてできた新しい道路は高いネットで両側がおおわれ、信号機がないので交差する道が分かりにくく通り過ぎてしまうほどです。かさ上げの為に運ばれてくる土は、町を取り囲む山を次から次へと切り崩して運ばれています。海岸線の少しの平地とそれを取り囲む山々がこのまちを創ってきたのだと思います。こうでもしないと町の再生はできないのでしょうか。

もう一つ気になったのは港付近の道路わきに立てられた防潮堤の完成予想の高さを示す鉄骨。7.2mもあり、見上げる程です。この防潮堤ができれば、海は全く見えない「海辺の町」ができてしまいます。TreeSeedのメンバーは「あれは考えられない。そのうち変更になるでしょう。でない」と言っていました。

防潮堤の計画高7.2mを表わす塔



車の高さより高く、5mの盛り土工事をしている現場

TreeSeedは、アーカイブ事業や被災地のガイド、交流スペースの提供など以前からの活動を続けています。今は、事務所をいくつかのブースに分け、パソコンを備えスマートフォンオフィスとしての利用を図ったりもしています。助成金が打ち切れデイサービスなどの活動ができなくなってしまうかもしれませんが、朝市等の継続を検討しているところだそうです。メンバーの中には経済的な理由から活動を離れる人もいますが、残った仲間たちで、また新たに町の活性化につながるような若い人達に向けた活動をしていきたいと、さまざまな提案を町にしています。先を見ている彼らに感心し、安心しました。
(副理事長 堀 千鶴)

INFORMATION

★地球の木のプログラムはあなたの会費で支えられています

学習会「インドシナ半島の歴史」

今日のラオス・カンボジアを作りあげた、その歴史を学びませんか？元JVCラオス担当の島村昌浩さんが丁寧にわかりやすく「インドシナ半島」の歴史を話します。

日時：7月12日（土）13：30～15：30
場所：なか区民活動支援センター 研修室1
（JR関内駅北口下車 徒歩1分 セルテ6階）
参加費：500円（資料代、ラオスコヒー付き）
※参加希望の方は、地球の木までご連絡ください。

6・7月のデポー展示会

6月 2日(月)	大丸デポー
6日(金)	7日(土) つなしまデポー
13日(金)	東戸塚デポー
25日(水)	26日(木) みたけ台デポー
7月 8日(火)	9日(水) せやデポー

地球の木オリジナルのフェアトレードグッズも販売しています。お近くのデポーへ是非いらしてください。

会員・ボランティアを募集しています



地球の木は、1980年代後半におきたアフリカ飢餓への緊急支援をきっかけに設立されました。誰にでもできることとして、1か月にランチ1食分500円を集め、支援活動がはじまりました。現在、ラオス・カンボジア・ネパールの3か国で困難な状況にある人たちの自立を助ける支援を行っています。



特定非営利活動法人

地球の木

地球の木は認定NPO法人です



<http://www.facebook.com/chikyunoki>

Facebookでの「いいね！」をお待ちしています。

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。また、神奈川県と横浜市の個人住民税からも控除となります